

俳句

大津俳句会

麦稈を焼く山裾を烟らせて

井芹眞一郎

花水木ひらひら空を翻す

秋山 恵子

たんぽぽの絮も旅人風もまた

市原 初女

帰郷の子待ちて庭枇杷袋かけ

江藤 みち

五月晴れ落人の家守る翁

大塚喜久子

トンネルを抜けて広がる麦の秋

岡崎 浩子

葉桜の覆ふトンネル空真青

坂本 セキ

朝の日を満面に受け柿若葉

佐賀 久子

水底みなそこの影動かして水すまし

堀川 妙子

雲切れて夏の月置く夜峰山

松尾 昭雅

雲行きを怪しむ軒の燕の子

武藤 規子

夏薊噴煙急に荒れてきし

渡邊佳代子

俳句

つのはな句会

仁侠の映画欲しくて五月の角曲キネマがる

星永 文夫

緑陰に硝子細工の子ら群れて

木庭 杏子

スキップのリズムで揺れる葱坊主

上杉 波

こいのぼりの頭上にそつと軍用機

矢嶋 道子

相寄りし茶摘み懐かし新茶飲む

水野 春子

ぶらんこを漕いで時空のはてまでも

梅木トキエ

紫牡丹のかすかな揺れよ誰がため息

塚本 洋子

背信がグラスを抜けて来る薄暑

榮田しのぶ

さくら並木古木風格見せ無言

志賀 孝子

台本にない道あるく麦の秋

田上 公代

短歌

大津短歌会

雨止みて朝の陽させる鞍岳に

雲たなびきて霞む頂き

鞍 岳志

花しのぶ愛でて冬越し願いつつ

可憐な花の咲くを待ちわぶ

管野 静

真砂なす崎津の浜に見つけたる

桜貝とや小さく光る

吉永 恵子

盛りあがる楠の大樹のもえぎ色

年嵩かさねつも空に輝く

豊岡ミツル

我が顔の染み見て多い濃ゆいとか

孫よおまえは未だ十二歳

渡辺佐代子

透き通る声に惹かれて見上ぐれば

桜散る中鶯の影

小平 善行

短歌

万年青短歌会

高菜葉をうつ寒もどり雪あられ

残り茎漬ける父母の顔偲ぶ

磯崎テル子

山羊は俺の背よりも長いぞと

笑顔一杯われに見せたり

中山 春代

地震のがれ三度の春の桜花

朝な夕なに映えて輝く

山内 信子

黄すみのれ早や群れ咲くや阿蘇原野

夫と遠出の過ぎし日の顕つ

合志 妙子

春彼岸岡のなだりの遠く迄

朝なさに見む花待ちかねて

合志 桃花

ままならぬわが身を支え九十才

「何が芽出たい」と言いし人あり

河北 幸一